

地域検討委員会におけるご意見・ご指摘事項と対応

会議名	第1回平成22年度海域の物質循環健全化計画播磨灘北東部地域検討委員会
日時	平成22年10月5日(木) 13:30~15:35

2. 海域の物質循環健全化計画検討方針について

・目標とする海域について

指摘者	指摘内容	対応
出口委員	健全な物質循環として、どのような海域あるいはいつの年代の海域を目標とするのか。	目標とする海域は、過去の海域の状態ではない。過去とは社会情勢が異なるため、現存の物を活用しながら、海域を健全な方向に持って行くという考え方に基づいて検討を進めたい。(藤原委員長)

・シミュレーションモデルについて

指摘者	指摘内容	対応
園田委員	シミュレーションモデルは貧酸素と貧栄養の両方が表現できるのか。	実行可能な範囲で対応するが、目的を絞って構築する(藤原委員長)。

・ヘルシープランの工程について

指摘者	指摘内容	対応
反田委員	3か年と短いため、生物など効果把握に時間がかかる項目など、実証実験の結果が明らかにならない状態で、地域のヘルシープランをたてる工程となっている点が気になる。	モニタリングが必要となる等の不足分は課題として掲載する(統括委員会事務局)。

・物質バランスについて

指摘者	指摘内容	対応
首藤委員	ノリの色落ちが生じている状態が、物質循環が崩れているということにならないのではないか。	目標とする状態は地域検討委員会で検討していく(統括委員会事務局)。

・用語について

指摘者	指摘内容	対応
藤原委員	「生態系の安定性」、「物質循環健全化」は科学用語として不十分なところがあるので、他に良い提案があれば使っていく。	情報収集整理や地域検討委員会の中で適切な言葉を検討する。

・基本方針について

指摘者	指摘内容	対応
出口委員	「生態系バランスの実現」と「物質循環健全化」の主従関係はどう考えているのか。	物質循環で不足する部分を補い、これによって生態系バランスが安定することによって物質循環が健全化するという考え方で記載している。方向性の修正が必要であれば、地域検討委員会で検討する（統括委員会事務局）。
		物質循環の変遷・現状把握し、対策を工夫することによって、関係者が納得する方向に持っていくという考え方で進める（藤原委員長）。

・環境省の方針について

指摘者	指摘内容	対応
山口委員	環境省として、目標とする状態をどのように考えているか。	人為的影響のない完全な自然状態ではなく、人の営みがある現在の状態を出発点として実施可能な状態をめざすことを考えている（室石室長）。
	本検討の検討結果を国はどのように活用していくのか。	施策との関係としては、総量削減の第7次のあり方答申の中で瀬戸内海については、「湾灘毎に研究する」必要性が記載されており、本検討はこれに該当するものと考えている。今後、第8次総量削減では、第6次から第7次にかけて検討した事項が取り込まれることとなる予定であり、本検討の検討結果も同様の扱いとなると考えている（室石室長）。

3．地域検討委員会の進め方について

・負荷量について

指摘者	指摘内容	対応
駒井委員	負荷量について、面源・点源も対象とするのか。海域に直接放流している事業場を把握するのか	負荷量は、基本的に環境省の発生負荷量等調査の結果を利用し、大規模事業場について詳細な情報が入手可能な場合は、兵庫県などから収集する予定。（当日回答済）。
	「加古川河口における流入量」は、実測値か原単位法か	平成3～4年の兵庫県による実測値及び現在兵庫県、大阪工業大学が実施している調査の実測値を用いる予定。（当日回答済）。

・対策実施の効果について

指摘者	指摘内容	対応
反田委員	対象海域は、流れが速く境界外からの移流による影響が大きいいため、加古川河口域周辺での対策実施による効果が明確に現れにくい。	モデルの構築を行う統括検討委員会事務局と相談し、対象海域を大きくする等の対応を実施する。

4. 地域の物質循環に係る情報整理について

・情報収集の範囲について

指摘者	指摘内容	対応
園田委員	情報収集はどの範囲を対象とするのか。	情報によって異なるが、シミュレーション構築に必要な情報は播磨灘全域とし、その他の情報については、項目によって範囲を検討する（当日回答済）。

・情報収集項目について

指摘者	指摘内容	対応
園田委員	海域から直接取水している大規模事業場の取水量・取水場所を収集項目に追加すること。	兵庫県等から情報を収集し整理する。また、既存検討の情報についても収集整理する。
藤原委員	播磨灘を対象とした既存検討で整理されている情報を利用して、情報整理の効率化を図ること。	

・シミュレーションについて

指摘者	指摘内容	対応
出口委員	シミュレーションモデルの地形は、どの年代の情報を使用する予定か。	大領域は最新の海図等の既存情報を使用して設定する。小領域は、最新の実測データの使用を考えているが、設定にあたっては、委員と相談しながら進める（当日回答済）。
藤原委員	本検討のシミュレーションでターゲットとなるのは、陸域から流入した栄養塩類について「運ばれる経路」、「運ばれるものの量と組成」、「途中での消費・再利用」である。	それらについて、情報収集の段階から重点的に検討することとする。
反田委員	シミュレーションモデルは、生態系モデルを構築するのか。	水質・底質・生物を考慮したモデルとする予定。計算対象範囲は播磨灘全域と大阪湾・紀伊水道を含む大領域から対象域へ絞り込む予定。計算期間は1年間の連続計算（統括委員会事務局）。

5 . 平成 22 年度現地調査について

・観測場所について

指摘者	指摘内容	対応
反田委員	St.1・2 については、地点的に船舶の航行の多いところであるが、連続観測機器の設置は可能か	St.1 は、船舶の航行がほとんど無いまたは少ないため出水がない限り問題ない。St.2・3 は航行船舶の少ない導流堤近傍に寄せて設置する予定。St.4 は航行船舶の影響が大きいため秋季調査時等に現地状況を踏まえて調整する（当日回答済）。

・水深の基準について

指摘者	指摘内容	対応
出口委員	採水水深(0.3m)、鉛直グラフの水深の基準は何か。	水面からの水深で表記している。表層における河川水の広がりに着目する現地調査のため、海底からの距離よりも、表層からの距離(水深)に着目する必要があると考えた(当日回答済)。

・シミュレーションモデルの重要地点について

指摘者	指摘内容	対応
園田委員	潮流調和定数測定地点のうちシミュレーションモデルを構築する際に重要となるのはどこか。	基本的に全体的に再現性を維持する必要があるが、特に、北部沿岸付近と鹿ノ瀬周辺海域が重要と考えている。(藤原委員長)。

以上